

第20回 寅さん考・その弐

IT生

前回に引き続き、寅さんについて考察してみる。寅さんといっても、我が寺田寅彦師のことではないので、あしからず。映画「男はつらいよ」の主人公として、世界中にもファンがいる車寅次郎氏のことである。

さて、東日本大震災から七回忌を迎えた東北の某所では、「私たちはくやしい」とメッセージが書かれたポスターがあるそうである。意味するところは、「自分たちの住む土地の歴史をあまりにも省みなかった」ことへの嘆きだという。

「反省」がないのが現代の風潮である、といい、そのことは「反知性主義」と呼ばれている。なぜそうなったのかというと、モノ社会の極みであり、人々は「便利至上主義」に陥り、次から次へとひりだされるモノを選ぶのに追われ、自らを省みるひまがないからである。人はもはや「人間」ではなくなり、モノの間に埋没する「物間」になりはてているからだ。

実は、映画「男はつらいよ」のテーマは、監督山田洋次が目指してきたところの「現代社会への批判」の側面をもつ。決してドタバタの喜劇などではないのだ。

劇中、寅さんはコトを起こしては、さかんに「反省」する。各作品のエンディングでは、寅さんは旅にでる。そして、各作品で邂逅した人々にハガキを送る。そこには必ず「恥ずかしきことの数々…」と仮名釘流の文字で書かれている。

毎回寅さんに反省を促すのは、周囲の人たちとのふれあいである。映画の解説本には「寅さんは、人々のあたたかい心に触れて、しばし考える。そして自分の性格や行動、果ては人生について深く反省するのだった」とある。

考える輩である人間が生きる上で必要なのは「変化」である。変化をもたらすのは、モノではなく、「人」と「自然」である。旅のなかに生きる寅さんこそ「人」と「自然」の中に生きている。年中裸足に雪駄姿である理由は、寒くなれば南へ行き、暑くなれば北へ行くからである。

対して、映画「男はつらいよ」を観てきた側について、映画評論家小林信彦氏は著書「おかしな男渥美清」の中でこう解説してみせる。

—すでに日本の大衆の知的レベルは低くなっていて、(映画「男はつらいよ」の展開パターンが) しつこくくりかえすことが必要であった。映画の中で繰り返される寅の下品な

テキ屋言葉には爆笑しても、渥美がさりげなく笑わせようとする瞬間の動きには大衆はさして反応しなくなっていた—

そうしたことの反省として、東北のポスター「私たちはくやしい」はあるのだろう。



旅と恋に生きる寅さんの物語は、現代文明批判でもある

(平成 29 年 3 月)